

# 私が満州で見聞きしたこと

桂心豊さんは詩吟の宗家。そしてお茶と踊りのお師匠さん。しかし若い頃は服飾デザイナーをしていました。今でも忘れられない出来事は満州で慰安婦の一人から聞いた話。「私にはあの時代の思い出を伝える義務があるのではないか」と考えるようになった桂先生に彼の地での生活などもあわせてお話を伺いました。

## 満州開拓団の一員として

私は弘前で生まれ、北海道で育ちました。NHKの連続ドラマ「おしん」の子供時代と同じ時期を北海道で過ごしたと言え、私がどのような時代を生きてきたか、お分かりになるかと思えます。

父は五十二歳のとき満州開拓団の団長となり、そして大陸へ渡ることになりました。大日本帝国が米英に宣戦布告した昭和十六年のことでした。

\*

当時、私は札幌市内の洋裁学校「文化服装学院」に通っていました。製図やデッサンでは何回も一番をとりましたし、自分がデザインしたものを完成品に仕上げるのが楽しくてたまりません。洋装店やテーラーが少なかった時代でしたが、将来は洋裁で身を立てようと思っていました。

ですから「開拓団を率いて満州に行き、農業をする」と言われたときは「いやです」。私は洋裁を学びたいのです。みんなが満州に行っても私はここで一人で暮らします」と、父の言うことを全く聞きませんでした。しかし最後は「満州国の首都・新京には大きな洋裁学校がいっぱいある。必ず学校に行けるようにしてあげるから」という約束をとりつけて、私は家族とともに海を渡ることにしました。

## 洋裁学校に編入し…

満州国の新京は現在の長春です。当時は満人や漢人また朝鮮人や白系ロシア人など様々な人々が暮らしていて、広い目抜き道路にバロック風の巨大な建物が目立つ街。

都市計画に従ってつくられたばかりの活気ある都市でした。

私は新京市内の「文化服装学院」に編入することになりました。学院長は英国で洋装を学んできた(後姿の)スラリとした老婦人で「洋裁の仕事に就きたいのです」という思いを話すと、多くの洋裁店や洋装店が参加するコンクールに私の作品を出すよう勧められるなど、様々なアドバイスをしてくれました。

コンクールと言えは忘れられない思い出があります。まだ学生であった私が、多くのプロを抑えて「金賞」となり、テーラーや洋装店が並ぶ吉野町でもひととき目立つ「中山洋裁店」のショーウィンドーに展示されたこと。母と姉は「まあ、信じられない…」でも「おめでどうー」ととても喜んでくれました。

## 満鉄に入社した私

昭和十七年の春、私は卒業と同時に学院長の推薦で「満鉄(南満州鉄道株式会社)」に入社しました。

満鉄は鉄道経営を中心に探鉱や製鉄所、港湾施設やホテルなど八十社ほどのコンツェルンの総帥です。ご存知の方も多いと思いますが「満鉄調査部」と言えば当時の満州国最高のシンクタンクでありました。

そんな満鉄での私の職場はエレベーターが設置された五階建て建物の四階にある婦人服部。一階から四階はデパートで女子社員はみんな社服(制服)を着ることになっていました。しかし私達には社服はありません。スーツであれドレスであれ、つねに流行の先端をいく洋服を自分で用意することになっていました。

洋服が自前ということもあつたと思いましたが、私の初任給は一三〇円。内地で平均的な会社に勤めた友人の月給が二〇〇円でしたから破格の高給取りです。社服を着た女子社員の中でモデルのような格好で仕事をしていた私達は「看板娘」でありました。

## 桃源境で迷子になって

私は満鉄の社員でしたから休暇ともなれば汽車を利用して遠くまで出かけたものです。昭和十八年のある日のことです。私は友人と二人で新京から少し離れた郊外の村はずれにピクニックに出かけました。

村の名前までは思い出すことができませんが、どこまでも続く草原に爽やかな風が吹いていたこと。そして抜けるような青空に雲がゆつたりと流れていたのを覚えています。ふと気がつくときと広々とした草原の中に大きな板塀に囲まれた不思議な一角がありました。四囲はぐるりと板塀がめぐらされているため中は見えません。高く巡らされた板塀には「桃源境」と墨で大きく書かれており、その下に人ひとりが入れられるくらいの板戸が半開きになっていました。

「桃源境…なんだろっ?」

と尋ねると彼女は

「知らないの? ピー屋よ!」

と言います。内地なら赤線と言つのでしょうが満州ではピー屋と言っていました。

「ね、戸が開いてるから見てみようか!」

好奇心旺盛な私は話のタネにと、そつと中をうかがってみました。すると表の板塀よりも小さな囲いや仕切りが幾つもあつてその間をとおる通路はまるで迷路のようです。人のいる気配はありません。

「貴女はここで見張りをしています!」

と言つて中に入ると通路はすぐにT字路に突き当たります。右も左もすぐに分かれ道になっていきます。迷つたら大変です。私は戻ることになりました。ところがどこで間違つたのか帰る道がわかりません。友人の名を呼びました。叫びました。しかし返事はありません。完全に迷子になってしまったようです。どうしようもなくなくなって四つ辻の真ん中に出て大声で

「ごめ、と伺、迷路の、した、ていく、と誰、うよ、くり、らい、らない、「いっ、「表が、家だ、く、お願、「そ、客さ、かな、てあ、「ど、と私、「朝、「朝、「そ、ら。と、「私、周旋、けで、それ、りを、貧乏、ない、年働、てみ、緒に、れて、た言、「働、「ご、金、き、れ、

前とうとうともあったと思いま  
切任給は一三〇円。内地で平均  
勤めた友人の月給が二〇円でし  
の高給取りです。社服を着た女  
でモデルのような格好で仕事を  
請は「看板娘」でありました。

### 現で迷子になつて

の社員でしたから休暇ともなれ  
用して遠くまで出かけたもので  
八年のある日のことです。私は  
で新京から少し離れた郊外の村  
クニツクに出かけました。

までは思ひ出すことができません  
までも続く草原に爽やかな風が  
こと。そして抜けるような青空  
たりと流れていたのを覚えてい  
と気がつくど広々とした草原の  
板塀に囲まれた不思議な一角が  
。四囲はぐるりと板塀がめぐら  
ため中は見えません。高く巡ら  
には「桃源境」と墨で大きく書  
、その下に人ひとりが入れるく  
が半開きになっていました。

「なんだらうっ」  
と彼女は  
「うー屋よ」  
す。内地なら赤線と言つのでしょ  
は「うー屋」と言っていました。  
聞いているから見てみよっか」  
盛な私は話のタネにと、そつと  
つてみました。すると表の板塀  
な開いや仕切りが幾つもあった  
「おる通路はまるで迷路のよう  
る気配はありません。  
「で身張りをしている」  
中に入ると通路はすぐにT字路  
ります。右も左もすぐに分かれ  
います。迷つたら大変です。私  
にしました。ところがどこで聞  
が帰る道がわかりません。友人の  
ました。叫びました。しかし返事  
さん。完全に迷子になってしまっ  
。どつしやうもなくなつて四つ  
は出て大声で

「めんざきーい。誰かいませんか」  
と何回も叫びました。しかし返事はあり  
ません。本当に困つてしまい、誰もいない  
迷路の中で私はぼつんと立ちつくしてしま  
した。と、そのとき遠くの通路を横切つ  
ていく若い女性が見えました。  
「も、もーし。こっちですー」  
と呼びかける振り返り「あらー」とい  
うような顔をして「瞬立ち止まった後、ゆっ  
くりと歩いてきました。年齢は私と同じく  
らいだと思えます。二十歳になつたか、な  
らないかの女性です。

「いったいどこから入つてきたの？」  
「表から。板戸が半分開いてたし、不思議な  
家だと思つたから。でも帰り道が分からな  
くなつて困つてたのよ。知つてゐるなら  
お願いだから出口を教えてください」  
「そつとね。ここは迷路になつてゐるからお  
客さんが帰る時はいつも出口まで送つてい  
かなければならぬの。大丈夫、連れて行つ  
てあげる」と言います。私はホッとしました。  
「ところで貴女はどこからきたの？」  
と私が聞くと  
「朝鮮よ」  
「朝鮮から？」  
「そつと、ここに來るとお金がたくさん入るか  
ら。お金を儲けるためにやつてきたのよ」  
と、こんな話を語り始めました。

「私の家はとも貧乏だったの。隣の村から  
周旋屋が回つてきて『満州で三年間働くだ  
けで立派な家を建てるお金ももらえよよ。  
それだけじゃない。その間、家に毎月仕送  
りをして親孝行もできる。こんなところで  
貧乏しているよりずっといいぞ』」ウンじゃ  
ない。隣村の〇〇姉さんと△△姉さんは三  
年働いて大きな家を建てたじゃないか。やっ  
てみないか」と誘われて、そこで友達と一  
緒に周旋屋のおじさんに頼んでこゝまで連  
れて来てもらったというわけ」  
滑らかな日本語です。あつげらんかんとし  
た言い方でした。

「儲けることはできた」と聞けば  
「この仕事はとも儲かるよ。家には毎月送  
金があつて両親は喜んでゐるし、親孝行で  
きて私も良かったと思つてゐるの。またそ  
れとは別のお金も貰つてゐるから」

### 「別のお金」

「ええ、兵隊さんが置いていくのよ。『明日  
俺たちは前線に行く。もう金は必要なくなつ  
た。使えない金だから俺のかわりに使う』  
いい。あんたにあげる。今日はあひがとつ  
と言つて私にくれるの。そして前線に行く  
の。兵隊さんは殆どがそう。多くの人が前  
線に行つたから、お金たくさんあるのよ」  
と言います。また

「三年経ては私は家に帰れるの。来年は家に  
帰るのよ。大きなお家を建てるつもりよ」  
と出口に着くまでこんな話をしてくれま  
した。私は聞き役。彼女はつと喋り続け  
ていました。…すでに六〇年以上も前の  
話となりましたが、私にとつては満州での  
忘れることのできない出来事でした。

### 考えられない「性奴隷」

NHKの「おしん」と同じ苦しい時代を  
生きてきた人の中には、慰安所での仕事を  
「職業」と決めた女性がいたことを、実際に  
見て知つてゐる人がいるはず。また朝  
鮮人だけでなく日本人も大勢いたことを  
知つてゐる人もいるはず。日本から満  
州への三年間の出稼ぎに出る女性が目立っ  
て多い地方では「嫁入り支度は身で稼ぐ」  
などと言われたものです。しかしこれらを  
証言する人は殆どいません。

ところが実際に見たわけでも、また記録  
もないのに「日本軍は朝鮮人を拉致して性  
奴隷とした」と主張する人がいます。  
このような日本の軍隊を、また日本人を  
貶める話を聞かされたに「そんな馬鹿なこ  
とはない。私は満州で実際に見聞きした事実  
や体験から断言できる。中には悪質な周旋  
屋もいただろうが、日本軍が性奴隷とする  
ため朝鮮人を拉致したことはない」と壇上  
に飛び上がつて大きな声で叫ぶにはいら  
れないほどの激しい怒りを覚えます。

最近になつて「慰安婦問題」が一部の方々  
の間で問題視されるようになってきました  
が、私の体験が「正しい歴史を伝えようと  
努力されている方々」に、何らかのお役に  
立つことができるならと思つ、このような  
お話をいたしました。

社員 助 止

契約書の作成  
株主総会運営  
デューリジェンス  
訴訟・調停  
雇用問題

毎月一回発行し、  
シンセー八億」の社  
年一回発行してい  
で優秀賞となつた感  
逆境にあればあるは  
社員と向き合つて  
れた「賢者の贈り物  
の墓標」(稲田縁)  
わが社の経営理念  
そしてパチンコホ  
は「読書を通して  
から社員一人ひと  
う知恵と勇気を得  
た社員達。バブル  
れまでに二〇億円  
社内報と読書感想

おしん 傳

おしん 傳

天鼓

お問い合せは

お問い合せは